

I. 序論:教会で起こりやすい「比較」と「分断」

- 人のからだは多様な部分が協力して一つとして生きている。
- 教会でも、互いを比較して
 - 「自分は役に立たない」という劣等感
 - 「あの人はおかしい」という批判・優越感に陥りやすい。
- きょうの本文から、教会とは何か、どう関わるべきかを学ぶ。

II. 本論1:教会の基本——御霊によって一つのからだ(12:12-13)

- 教会は「多くの部分」から成るが、「一つのからだ」。
- コリント教会には民族・身分など大きな違いがあった(ユダヤ人／ギリシア人、奴隷／自由人)。
- それでも一つになれた理由:
 - 一つの御霊によるバプテスマによって「一つのからだ」とされた。
 - 「一つの御霊を飲んだ」=同じ御霊によって生かされている。
- 教会の一致は、気が合うからではなく、キリストに結ばれているから。

III. 本論2:劣等感への処方箋——神様が多様な部分を備えられた(12:14-18)

- 足や耳が「自分は必要ない」と言っても、属さなくなるわけではない。
- 目だけ・耳だけのからだは不自然で不完全。
- 決定的な一節:12:18「神はみこころにしたがって…備えてくださいました」
- 適用:
 - 今の役割・性格・賜物は偶然ではなく、神様のご意思の中で備えられた。
 - 「自分なんて」と自己否定せず、神様が与えた持ち場を受け取る。

IV. 本論3: 優越感への処方箋——弱い部分ほど大切にされる(12:19-24)

- 目が手に「いない」と言えない(12:21)。
- 弱く見える部分が、かえってなくてはならない(12:22)。
- 「見栄えが劣る部分を覆う」とえ(12:23-24)
 - 人に見せない部分ほど、命に関わる重要さがある。
- 適用:
 - 教会の「弱く見える人」「見栄えがしない人」「傷や恥を抱える人」を切り捨てず、守り、愛で覆い、共に一つとされることが健全さにつながる。

V. 結論: 実践——キリストのからだとして配慮し合う(12:25-31)

1) 互いに配慮し合う(12:25-27)

- 分裂ではなく、互いのために同じように配慮する。
- 「苦しみを共に苦しみ、尊びを共に喜ぶ」(12:26)。
- 例話: 足の小指をぶつけると体全体が痛む＝教会も痛みを共有するのが健全。
- 実践提案: 祈禱会・交わりの場で課題を知り、祈り合い、支え合い、喜びも分かち合う。

2) 賜物と役割は多様——しかし中心は主の教え(12:28-30)

- 使徒・預言者・教師などの列挙は、優劣というより教会が建て上げられていく順序の理解。
- 教会はまず主の言葉・主の教えに立つ。その上で賜物を用いる。
- 奇跡や異言などを先にして、みことばを後回しにしない。

3) 次回へのフック(12:31)

- 「よりすぐれた賜物」「はるかにまさる道」＝次の 13 章へつながる問いとして提示。

祈り(要旨)

- 比較による落ち込みや高慢から守られ、
- 一人ひとりがキリストのからだの大切な一部として受け取られ、
- 違いを認め、弱さを大切に、痛みと喜びを分かち合う教会となるように。